The sword

秋月美杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｈｅ　ｓｗｏｒｄ

【Ｎコード】
Ｎ６３０２Ｉ

【作者名】
秋月美杏

【あらすじ】
朱莉は沙羅という少女に惹かれてついて行くがことごとく事件に巻き込まれて・・・・・・
武士の放浪&冒険物語！！
・・・・・というのは嘘です。ホントはかなり怖いホラーです。
でもそんな怖くねーとか思うかも知んないけれど見ていただければ幸いです

序章　死体（前書き）

がんばってかきます。

序章　死体

――――鬼の目から涙がたくさんこぼれ落ちた。
そのたくさんの涙は美しく輝きながら地球に落ちて妖刀と呼ばれる刀たちになる。
その刀たちにはそれぞれの名前があり神の力が宿ると言い伝えられている。
その刀それぞれに主がいる。主はそれ相応の力を持ち支えることができる。
だが、その主が刀を手放すと主は死ぬという。

＊＊＊＊＊

1人の少女がふらふらと歩いていた。それは、別に構わないんだが周りがおかしかった。
数千人の死体の山なのだ。少女の周りをぐるりと囲んでいた。それでも少女は気にする様子も一切なく、ただ、ただゆっくりと歩いていた。すると死体から手が伸びてきて少女の名前をよんだ。
「沙羅・・・・・・・・出して。」
力強いはっきりした声だ。その声を聞いてその少女――水無月沙羅(みなづきさら)はハッと振り向いた。
「・・・・・朱莉？・・・・・どこー？」
沙羅は目が見えない。いや自分で目を潰してしまったのだ。だから声を張り上げないと耳でしか聞いていないので聞こえないのだ。
死体にうもれた少女――楠木朱莉(くすのきあかり)は声を張り上げて叫んだ。
「こっち、こっちー！！！助けてぇ！！！！」
「うん。今行くー。待ってて。」
相変わらず抑揚のない声だ。でも朱莉はそういう不思議なところに惹かれたのだ。

「おーい！！」
「そこね？」
沙羅はそういって朱莉に刀を向けてきた。
「ちょっとまって！！――――――〈炎のように散り・・・風のように吹き荒れろ・・・花のごとく咲け！〉紅紀（こうき）！！！！！」
すると花びらが朱莉の全身を包み込んだ。
「いいよー」
そういうと、沙羅は大きく夜のきれいな空気を吸い込んで思い切り大きな声で叫ぶ。
「――――――〈きらめく水よりも輝き・・・月のように光りたまえ・・・雪のきらめきよ・・・全てを照らし出せ。〉・・・雨月（うづき）」
抑揚のない声は叫んだといっても、そんなに大きな声ではなかった。しかしその瞬間、水蒸気が刀から溢れその雫が1粒1粒刀の形を成してヒュッ、と音をさせながら飛んでいき朱莉の居る場所を粉々にしてしまった。

序章　死体（後書き）

とくになし

別れ

朱莉は煙が上がった場所からそっと立ち上がった。
「んー・・・前より強くなった？沙羅・・・いつのまに・・・・・」
首をひねる朱莉。そこに沙羅が駆け寄ってきた。
「大丈夫？・・・・・朱莉・・・・・前より強くなった。・・・・はじき返す力が違った。」
そういって刀を収める沙羅に向けて朱莉は
「いや・・・・沙羅も強くなったね・・・・」
といった。
「そう。・・・・・それにしても・・・・なんかいるよね。後ろに・・・」
沙羅はそういって刀に手を掛けた。朱莉も沙羅も気付いていた。後ろに、何かの気配がすることに。
「声・・・掛けて見る？」
朱莉がそう訊くと沙羅は何も言わずに刀を抜いた。
「そんな気は無いのね・・・・」
沙羅がそうしたように朱莉も刀を抜いた。
「いい加減、出て来れば？・・・誰かさん。」
朱莉がそう叫ぶとしばらくして、
「ばれてましたか・・・・やはり・・・」
と茂みから声がした。
「げ、こ、この声は・・・・・」
朱莉が、苦虫を噛み潰したような顔になった。
「黒田佑・・・・いつの間に。」
沙羅が後をつなぐ様に答える。
すると茂みからガサガサと男のヒトが姿を現した。
「さあ、朱莉姫君。・・・城に帰りますよ。・・・いくら貴女でも父上の御命令なんですから。きいてください。」

漆黒の髪に若草色の瞳を持つ少年の名前は黒田佑という。
朱莉は元姫である。佑は朱莉の執事みたいな人だ。
「嫌よ！あたしはかえらないっ！」
「無理言わないで下さい！」
2人は喚いた。
「沙羅・・・あんたもなんか言ってよ！」
朱莉はそういって沙羅に視線を向けた。
しかし沙羅は何も言わずクルリと後ろを向いた。
「佑・・・いや、兄さん・・・・連れってていいよ。朱莉は・・・もう私より強いから・・・・」
「！？・・・沙羅っ！なにいって・・・・・」
言葉をさえぎって沙羅は言った。
「もういいよ朱莉・・・貴女は強い。ほかの誰よりも・・・ね。」
「沙羅。いいのか？ほんとうに・・・・・」
佑は去っていく沙羅の後ろ姿を見つめながらそうきいた。
「いいのよ別に。さっさと連れてって。」
そういって沙羅は去っていった。
「まって！・・・・さらあっ！！！」
悲しい朱莉の声が響いていった。

朱莉（前書き）

ちょっとグロイので嫌な人は見ないほうがいいです。

朱莉

朱莉は佑に連れて行かれた。
「おお、朱莉！！心配したぞ！」
朱莉の父はそういって朱莉の肩をポンッとたたいた。
その手を軽く払い除け朱莉は自室へと向かった。
「・・・・姫・・・」
佑はそれに付き添いながらそう呟いていた。
「姫なんて呼ばないで。・・・殺しちゃうよ？」
にこやかにそう言った朱莉からは殺気が滲み出ていた。
「・・・・・はい。朱莉様。」
佑はそう言い、それからは無言で朱莉に付き従った。

＊＊＊
自室に行って朱莉は考えていた。この城から抜け出す方法を。
「沙羅・・・・・・・・なんで??あの時止めてくれなかったの??」
朱莉はそう呟いた。率直に沙羅に聞きたかった。
――なんで・・・・・？
朱莉は自分の枕に顔を埋めた。
「・・・・・・・・・・・・・・・このまま一生こんな所で暮らすのはどうしても、いや・・・」
ふと朱莉は顔を上げてそういった。
そして剣を抜き、叫んだ。
「・・・〈花のように舞い散り・・・風のように吹き荒れろっ！劫(ゴウカ)火よ全てを焼き尽くせっ　！！紅紀〉っ！！」
朱莉がそう唱えた途端、
「きゃあああああああああああああああああああああああああああ

あああああああ！！」

と叫び声があちこちから轟いた。

朱莉の刀、紅紀の技、〈紅蓮の劫火〉は対象のもの全てを焼き尽くす。

――――――骨までもを灰にするまで。

皆が劫火に飲み込まれていくのを朱莉は黙って見ていた。

そして、”彼女”が来るのを待っていた。

時々自室に炭になりかけたモノが迷い込んできたが無視すれば皆、炭になっていった。

しかし、佑だけは殺さなかった。いや、ころしたくなかった。

「朱莉っ！てめえっ！」

佑は朱莉の胸倉を掴み激しく揺すった。

「自分の親、壊してまで会いてーのかよっ！？」

「・・・・・」

朱莉は黙る。

そして佑の言葉には耳も貸さず、”彼女”を待った。

朱莉（後書き）

さあ、もう少しでクライマックスです！
みてください！！！

許婚（前書き）

前のあとがきの内容は嘘です。
ごめんなさい。
でもがんばって書いたのでみてください！！

許婚

沙羅が感じとったのは木の焦げた匂いと血と人間の脂の匂いだった。

「・・・・・・朱莉・・・・・・なんてことを・・・・。」

呆れ半分、哀れみ半分で沙羅はそういった。

「行かないと。たぶん目的は私だから・・・そうでしょ？・・・・・・爽太郎殿？」

沙羅はそういって後ろから腕を掴んだ人物に話しかけた。

「沙羅はん、行ったらあきまへんえ。うちは止めまへんけど、あの御方が・・・・水無月皐（みなづき　さつき）はんがとめるように・・・とゆうてはりました。」

その人物――――――――草凪爽太郎（くさなぎそうたろう）はそういった。

「っ！！今頃になって・・・私と佑を捨てておいてそんなことを・・・・・母上はそんな気はないでしょ　う・・・・放して頂戴・・・・・爽太郎殿。・・・・・・殺されたいのですか？？」

沙羅はそう嘆いた。殺したくないから。

しかし、爽太郎はクルリと沙羅を振り向かせ沙羅には見えないその美しい翠の色の瞳で沙羅の眼をじっと見つめた。そしてギュ、と無言で沙羅の小さな身体を抱きしめた。

「！！」

びっくりして沙羅はその手から逃れようとしたが思ったよりも力が強く放れられない。

「行かないで欲しいさかいに・・・・・・そう言ってることが解りまへんか？・・・うちかてほんとはい　って欲しい訳があらへん。せやかて・・・・うちが言っても行きますやろ？だからや。・・・・・うち　と一緒に行くかそれとも・・・・・うちとここで死ぬかや。」

数瞬、沙羅は何を言うのかと思ってしまった。
「私と一緒に死ぬ??・・・・・どういうこと??」
爽太郎はぱっ、と沙羅を放すと声を出さずに微笑んだ。
「言葉のままや。戦って勝つか・・・それとも負けて共倒れになるかってことや。・・・・ゆうときます　けどうちは一歩も引く気はあらしまへんで・・・・・うちがついていってもええんなら・・・・・ここ　で余計な血を流す必要はありまへんえ。」
しばらくの間沙羅は思案したがやがて諦めたように溜息をついて
「・・・・・・・・・・仕方ないわ。わたしは許婚（いいなずけ）だもの。ついてきて。」
といった。
＊＊＊
「佑・・・・不思議だと思わない？あたしの炎にまかれた人はみんな死んでしまったのに1時間もすれば　生き返ってくるのよ・・・・・・まあ・・・まともな状態ではないけれど。でもね・・・死んだ父はあたしを本当にきちんと育てなかったのよ・・・。あたしは毎晩泣いていたわ・・・・鎖につながれてね・・・・そこにやって来たのがまだ目が見えていた頃の沙羅だった・・・覚えてる？佑・・・あの日のこと・・・・」
「・・・・・・・・・」
佑は何も答えない。炎にまかれた人々を呆然と眺めている。
朱莉はつづけた。というよりも訊いた。
「あたしは・・・・・あたしはあの時沙羅から禍々しい魔力、生命力を感じたわ。・・・・・佑は知ってるの？・・・・・何で沙羅が両眼をあの魔女に差し出したのか。」
「・・・・・・ああ。知ってるよ。」
ややあって佑がそう静かに言った。
「どうして？」
「魔力が膨れ上がったのを抑えるためだ・・・・あいつの魔力は強すぎる。だから、その力を抑える代償として沙羅は両眼をやったん

だ。」
「・・・・・・そうだったの・・・・・・・・佑・・・・・・・いい加減術を解いてくれる？始めからわかってたんだから・・・・・・」
「あ、やっぱばれてたか・・・〈汝流れ星を解き放つ光となれ・・・・風雅っ！〉」
するとキィィ・・・・と澄んだ音がし元の城が姿を現した。
元のままのきれいな城が。
「・・・・あたしはまだまだだったって事ね・・・・」
朱莉はそうため息をついた。そして刀を収めるとそのまま座り込んでしまった。
佑が飴を差し出した。透明色の美しい飴。
「・・・・・頭冷やせ。」
「・・・・・・・・ごめん・・・・・・」
しばらくの沈黙の後、朱莉は飴を受け取って口に入れた。

許婚（後書き）

自分でよくもまあかけたと思います。
この調子でバリバリ書きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6302i/

Ｔｈｅ　ｓｗｏｒｄ

2010年12月19日13時43分発行